

万葉の川心まん よう かわ ごころ

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

出雲守 門部王いづものかみ かどべのおほきみの京師を思へる歌みやこ

後に、姓 大原真人おほはらのまひとの氏を賜へり(巻第三 三七一番歌)

飮宇の海おいう うみの 河原かはらの千鳥ちどり 汝なが鳴けば

わが佐保河さほがはの 思おもほゆらくに

人生をマラソンに例えると、折り返し地点を過ぎた頃であろうか。と書いて、「人生は折り返して戻るものでもないけれど・・・」とひとりごと。いつ終わるとも分からない命であるのに、もしも、平均寿命を全うしたならと考えてみる。そういえばふるさとで暮らした日々よりも、家を出て過ごしてきた日々の方がいつの間にか長くなっていた。時折テレビから懐かしい地名が聞こえると、記憶の引き出しがしばし開いて、また閉じる。楽しかったこともあるが辛かった記憶もある。笑って話せることもあれば、見えない涙が流れることもある。だから引き出しをそっと閉じる。それは、もう戻らない戻れない場所だと思っているからかもしれない。

この歌を詠んだ門部王かどべのおほきみは、天平時代の初め、国司として奈良の都から若くして出雲国に赴任してきた。当時の出雲は上国で、島根県松江市の意宇平野付近一帯が政治文化の中心地として栄えていたと言われている。意宇川のほとりを歩いて、いつしか河口までやってきた。見ると千鳥が群れて鳴き合っている。お前が鳴くと、故郷の川、私の佐保川が思われてならないものを。「八月の下旬になると今でもこの地区には地元で「シャク」と呼ばれる渡り鳥がやってくるといふ。季節を違えず、道を失わず、鳥は大空を渡ってやってくる。翼を広げ、彼方へ飛び立つ姿と、この地に舞い降りる鳥の姿は、古来か

ら神としても考えられていた。

万葉時代、千鳥の鳴く声は、妻を思い、恋しい人を慕う声であった。門部王にとつては、都の懐かしさ、離れた故郷への募る想いがあふれる音として心に響いたのだろう。「わが佐保河」と言い切れる土地への深い情が羨ましい。いつか帰る、必ず帰る、そんな想いもまた感じられるのである。東出雲町に国庁跡があるが、この東出雲町は八月一日に松江市と合併した。七月二十九日付最後の東出雲町のホームページには、「私たち郷土に關係した歌がふくまれていることは、何としても喜ばしいことです。それは私たち東出雲の地が古代、上代に栄えた出雲文化の中心地であった事実を物語るだけでなく、地元の私たちにとつても誇るべき大切な文化なのです。」と、万葉集とのつながりについて詳しく書かれていた。町の名は変わっても、この地を大切に思う人々の想いは変わらない。

川を歩くと、来し方行く末の間において、おのずと人生や故郷を思う。川原はそんなふう立ち止まる場所、懐かしむ場所、マラソンの給水所のように生き返る場所であるのかもしれない。転々と移り住む我が身なれど、「わが○○川」をいつかもちたいと願っている。



島根県益田市・島根県立万葉公園  
人麻呂展望広場・歌碑